

イエイツとアセンダンシー

—世紀末にみる終末意識—

日 下 隆 平

はじめに

- 1 終末意識とイエイツ
- 2 終末意識とアセンダンシー
- 3 スウィフトとイエイツ

おわりに

は じ め に

本稿は19世紀末アイルランド社会に起きた地主階級の没落がイエイツにどのような影響を与えたかを彼の詩や劇を通じて検討するものである。イエイツの育った社会背景は旧勢力が力を失い新勢力にとって変わろうとする時であった。地主階級の没落の兆候はマライア・エッジワースの作品が世にでた頃から徐々に進行してきたものである。ここで述べるアセンダンシーとは社会における旧勢力を指し主としてプロテスタントの支配階級をいう。この論文は、(1) 終末意識とイエイツ、(2) 終末意識とアセンダンシー、(3) スウィフトとイエイツの3部からなる。先ずイエイツなどのモダニストに特有の終末感覚をその詩に見だし、つづいてその感覚が旧勢力の没落に起因するものであることを検討する。最後にスウィフトとイエイツにみるアセンダンシーとしての同一性を両者の作品やエッセイから論じてゆくものである。

1

W.B. イエイツ (William Butler Yeats 1865-1939) が黙示録的世界観を述べた詩としてつぎに引用する『再臨』はよく知られている。鷹の描く弧によって大きな環 (ガイアー) が比喩的に表現されていて、その動きは歴史の環が廻転することで生じる変化を表そうとしている。その力は制御できないほど強いもので「鷹匠の声もとどかない」。メイザース (MacGregor Mathers), A.E (George Russell) などのイエイツ周辺のものも至福一千年 (Millennialism) の思想を述べ、時代の終焉と新たな時代の始まりを熱っぽく語っていた。¹ これは全ヨーロッパ的な現象ともいえた。

Turning and turning in the widening gyre
 The falcon cannot hear the falconer;
 Things fall apart; the centre cannot hold;
 Mere anarchy is loosed upon the world,
 The blood-dimmed tide is loosed, and everywhere
 The ceremony of innocence is drowned;
 The best lack all conviction, while the worst
 Are full of passionate intensity.

Surely some revelation is at hand;
 Surely the Second Coming is at hand.
 The Second Coming! Hardly are those words out
 When a vast image out of Spiritus Mundi
 Troubles my sight: somewhere in sands of the desert
 A shape with lion body and the head of a man.

フランク・カーモードによれば、「人間は、詩人同様、生まれるといきな

り『事の最中に』（*in medias res*）突入し、死ぬときも『事の半ばで』（*in mediis rebus*）死ぬ。そしてその短い一生を意味づけるための、虚構による始めと終わりのとの調和を必要とする²のであり、その意味で〈終末〉とは自分自身の死の表象であるという。その帰結として歴史上何度となく〈終末〉の意識が現れては立ち消えていった。その現象は11世紀から16世紀の西ヨーロッパを扱ったノーマン・コーン（Norman Cohn）の『千年王国の研究』に詳しい。³

この〈終末〉の意識は身近なところでは19世紀末において危機意識と結びつきもっとも明瞭な形で現れた。それらはマックス・ノルダウ（Max Simon Nordau）の著作やデカダンスの意識、ユートピア的革新主義を生み出した。カーモードは〈終末〉の意識をもつ人々の特徴として過渡期の様相をあげて、「それはヨアキムの思想の現代的な神格化である。すなわち、自分の時代は二つの大時期の間に挟まった過渡的時代であるという信念が、過渡期そのものが一つの時代、一つのサエクルムになるという信念に変わるのである」と述べている。⁴ イエイツは『自叙伝集』のなかで自らが過渡期に生きたことの認識を「それはわれわれが、いわゆる『過渡期』に生きたために首尾一貫性を欠いていたからであろうか、それともわれわれはただ正反対のものを追求していただけなのであるか?」⁵と表現している。

彼によれば、歴史の大きな転換期には無秩序（“mere anarchy”）と流血（“blood-dimmed tide”）は不可欠の要素となり、それらは戦争や革命という現象となって現れる。善と悪は対立するが大概の場合悪の力が優位をしめる。そしてその悪が新たな時代の善に取って代わる。このような認識は『ヴィジョン』に裏づけられている。⁶ 「『ヴィジョン』を書いていたとき、私の心にはたえず『恐怖』という言葉が刻印されていた。そしてあるときは、一時代の終わりに地震と大火と洪水が起こるといふ昔のストア派の予言も心に焼きついていてた。しかし私はそれを文字どおりに受け取ってはいなかった」と彼は書いている。⁷

A gaze blank and pitiless as the sun,
Is moving its slow thighs, while all about it
Reel shadows of the indignant desert birds.
The darkness drops again; but now I know
That twenty centuries of stony sleep
Were vexed to nightmare by a rocking cradle,
And what rough beast, its hour come round at last,
Slouches towards Bethlehem to be born?

(“The Second Coming”, pp. 399-400.)

この詩の書かれた背景には、世紀的区分に加えて直接的には当時のアイルランドの政治状況（イースター蜂起）や1917年のロシア革命があろうが、今世紀初頭ヨーロッパに蔓延した軍国主義、それに19世紀的な価値観や秩序の崩壊があった。のちにイエイツはエセル・マニン宛の書簡の中でこの詩にふれ、コミュニスト、ファシズム、ナショナリストなど「現在起きようとしていることを17年も前に予言している」と述べている。⁸とくにアイルランドにあっては、地主階級の崩壊にともなうプロテスタント・アセンダンシーの没落という社会構造変化が進行中であった。イエイツはこの終末感覚とアセンダンシーの終焉とを重ね合わせて感じとっていた。

モダニズムの旗手と見なされるイエイツであるが、彼は決して進歩的な体質で育ったのではない。それどころか旧弊な社会制度の中で成人していった。彼にとって好都合だったのはナショナリズムの高まり、没落するアセンダンシーなどの因子が彼の創作力に効果的な役割を果たしたといえよう。モダニストの一つの特徴が黙示録的性格をもつことであるとカーモードは指摘したが、イエイツにもこれは当てはまる。彼がこれをもてたのはアイルランドの社会構造変化と無関係ではありえない。さらにシェイマス・ディーンはすべてのナショナリズムはそれ固有の本質を認識しようという点で形而上的な一面をもっていると述べた。つまりそれ故に、自己認識としてのナショナリズム

ムは力と説得力のあるモダニズムの文学となりえたのだと指摘して、ナショナリズムとモダニズムの関連を明確にした。⁹ またイーグルトンはアングロ・アイリッシュが自らの貴族主義的なロマン主義と、中産階級的なゲールの人々のナショナリズムという位相の異なるロマン主義のあいだに、ある種の同一性を捏造しようとしたことを指摘している。¹⁰ そうすることで、イギリスには実現しえないモダニズムを実現することができたのである。つまり今世紀のアイルランドのモダニズムはその社会的・歴史的な特性から生まれたのである。このような観点からイエイツの終末意識（あるいは崩壊感覚）をつぎに検討してゆきたい。

2

イエイツは彼の作品の随所で終末意識を表現しているが、なかでも前述の『再臨』（“The Second Coming”）、『ヴィジョン』（*A Vision*）のなかでより明確にその感覚が表れている。このような意識は世紀末ヨーロッパで広く見られた現象ともいえるが、イエイツの場合はより強くいだいていたといえよう。本稿ではアイルランド変革の時期すなわちアセンダンシー支配が衰退してゆくアイルランドの社会構造の変化との関連からその意識をみてゆきたい。幼年時代にイエイツのジレンマの核になるものが彼の「アングロ・アイリッシュのもつ孤独」（“Anglo-Irish solitude”）であったことは以前に述べたとおりである。¹¹ 言うまでもなくその当時は、土地地主として支配者階級であるプロテスタント・アセンダンシーと小作人として被支配階級であるカトリック教徒という構図がはっきりと確立されていた時代であった。

イエイツ家もわずかながらキルデア地方に土地を所有し不在地主として地代を得ていたということでは彼の帰属意識が支配者階級であるプロテスタントにあったことを裏づけるものである。イエイツが15歳の頃、ロンドンで画家修業中の父に連れられてアイルランドに短期間帰ったことがあったが、その原因はイエイツの父も不在地主として土地争議に遭遇して地代収入がまったく途絶えたためであった。¹² 言うならばイエイツの育った社会背景は旧勢

力が力を失い新勢力にとって変わろうとする時であった。この間の事情について、歴史学者のフォスター (R.F. Foster) は近年著したイエイツに関する伝記のなかで以下のように述べている。イエイツはアイルランドの独立とともに新生アイルランドの詩人として名声を博するようになった。ところが同時に彼は又旧体制下の申し子であった。つまりヴィクトリア朝時代のプロテスタント・アセンダンシーに属していた。彼の幼年時代と青年時代はその没落を特徴づける出来事に彩られている。グラッドストーン首相がイエイツの曾祖父と祖父が教区牧師をかつて務めたことのあるアイルランド聖公会 (Church of Ireland) を廃止したのは彼が4歳の時のことであった。1870年彼が5歳のとき土地法が成立し英国政府は地主の財産管理に介入した。そして祖父と交友のあったアイザック・バット (Isaac Butt) は自治運動を開始した。7歳の時に無記名投票の成立によって小作人の有権者は自由を獲得し地主の政治力に多大な影響を与えた。12歳の時にはパーネルがアイルランド議会党を掌握した。彼が14歳の時になると土地争議が持ち上がり小作人達は彼らの地代の不払いを始めた。17歳の時にアイルランドのナショナリストのパーネルと英国自由党党首のグラッドストーンとの間で和解が成立しその4年後第一次自治法案が下院に提出されたが否決された。彼が21歳の時のことであった。青年期までの彼はアセンダンシーの崩壊が始まるまさに決定的時代にまたがっていた。それはロンドンで生計を立てていた没落階級のボヘミアンとなった家族にもいえることであった。¹³ このように、アセンダンシーが没落してゆく過程でイエイツは彼自らの心の葛藤を作品化していったのである。このような彼の崩壊感覚はグレゴリー夫人所有のクール・パークが借地代軽減法によって消滅してゆく懸念とだぶってつぎのような詩においても表現されている。

How should the world be luckier if this house,
Where passion and precision have been one
Time out of mind, became too ruinous

To breed the lidless eye that loves the sun?
And the sweet laughing eagle thoughts that grow
Where wings have memory of wings, and all
That comes of the best knit to the best?¹⁴

このようにイエイツのアセンダンシーの象徴は今なお残る18世紀の大邸宅によって表されている。その中にはリサデル・ハウスやサンディー・マウン
ト城、マーヴィル・ハウスも含まれた。

W.B.イエイツはこの崩壊感覚をアセンダンシーの終焉とを重ね合わせて
感じとっていたふしがある。この文化を具現する最たる例として、バークレー
(Berkley) やバーク (Burke) などとともに、ジョナサン・スウィフト
(Jonathan Swift 1667-1745) を挙げているが、なかでもスウィフトは彼
と共通した文化的基盤と精神をもつものと考えた。イエイツは彼の『我が作
品のための総括的序文』のなかで「アイルランド風」なるものについてつぎ
のように述べている。

「アイルランド風」なるものは16世紀と17世紀を通じて絶滅戦争と化
した戦争を幾たびも経験しながら、今日に至るまでその古代の「鉦脈」
をよく保存してきたのである。レッキーがその『18世紀アイルランド』
の冒頭でいっているように、アイルランド人ほどに大きな迫害を受けて
きた国民はどこにもいないし、その迫害は現代に至るまでやむことはな
かった。そういう過去が常に身内に生きているわれわれの憎しみに匹敵
するような憎しみは、どこの国民のなかにも見当たるまい。憎しみが私
の人生を毒し、憎しみに適切な表現を与えなかったということで自分の
女々しさを非難するようなときもままある。漂泊の農民詩人の口を借り
てそれを語るくらいでは足りないのだ。¹⁵

ここでイエイツはクロムウエルによる虐殺や迫害について述べたあと、それ

によって国民の憎悪が生まれ、それが「アイルランド風」なるものを育ててきたと述べている。さらにイエイツは次のように思い起こしている。「たとえば私の結婚は私が知る限りにおいて最初に直系のイギリス人との結婚であるとしても、私の家族の名前はすべてイギリス名前であり、私は自分の魂をシェイクスピア、スペンサー、ブレイク、おそらくはウィリアム・モリスに負っており、また英語によって考え、喋り、書いていることを、私が愛するものいっさいは英語を通じて私のもとにとどいたものであることを」と。この様なとき彼は二つの文化の狭間で苦しみ、「かくて、私の憎悪は愛を伴って私を苦しめ、私の愛は憎しみを伴って私をさいなむ。……中略……かかるものがアイルランド人の憎しみであり孤独であって、この人生への憎悪こそスウィフトに『ガリヴァー』を書かせ、彼自らの墓碑銘を書かせたものなのだ。いや、スウィフト一人に限らぬ、同じ憎悪が今日なおわれわれを極端から極端へと振れ動かせ、自らの正気を疑わせかねないものなのである」¹⁶と述べている。つまり、英国・アイルランド両方の文化に属すが故にどちらにも確たる帰属性をもち得ないアングロ・アイリッシュの「孤独」の一面をのぞかせている。このような板挟みの感情をテリー・イーグルトンはガリヴァーを例にして適切に説明している。「スウィフトはアイルランド人を奴隷の身分に落としたイギリス人を罵倒し、次に、この隷属状態を内面化したアイルランド人を非難する。(中略)互いに相容れない文化的規範のあいだで身動きのとれなくなったガリヴァーは、かろうじて容認し得る媒介項 (“a barely tolerable in-betweenness”) となることに甘んじるしかない。この意味でガリヴァーは、植民地化された民であると同時に植民地支配者でもある、アセンダンシーを表わす適切な形象ということになる。」¹⁷従って、イーグルトンの立場からすれば、ガリヴァーが表わす形象はスウィフトやイエイツをも含むものとなるだろう。スウィフトはアイルランド人を軽蔑しながらも、他方ではアイルランド人の自由を擁護した。スウィフトは『ドラピア書簡第4巻』でアイルランドの政治的自立を説いた。

イエイツの心を動かしたのはスウィフトの誇り高い知性とアイルランドの

正義への身を捧げた点であろう。「スウィフトのことが私の心から離れない。スウィフトはいつも私の身近にいる」と述べたことがあった。¹⁸1930年ウインダム・ルイス (Wyndham Lewis) 宛の書簡で、エディス・シットウェル (Edith Sitwell) の *Gold Cost Customs* について述べたときスウィフトについて「激しさ、忍耐、知恵によって気高いものになった激情。私達はかつて一人の人間の中にそれを持っていた。彼は今、歴史上もっとも優れた墓碑銘の下にセントパトリック教会で眠っている」¹⁹と述べている。プロテスタント・アセンダンシーとしてスウィフトと同じ伝統のなかにいるイエイツは「私たちが継承してきた孤独に屈したくない」とも言っている。こうしたスウィフトの残像はイエイツの生涯に大きく影を落としている。つぎにアセンダンシーの象徴たるスウィフトについてみてゆきたい。

3

ジョナサン・スウィフトは1667年イギリス人を両親としてダブリンに生まれ成長する。父親の死後伯父ゴッドウィンの世話になり、トリニティ・コレッジを卒業する。21歳のとき名誉革命のあと混乱するアイルランドを去ってイギリスへ行く。27歳までイギリスで過ごしたのち、ベルファーストの牧師に任ぜられる。31歳のときアイルランド最高法院長として赴任するバークレー伯の邸内牧師としてダブリンへ帰る。40歳のときアイルランド国教会の使者としてアン女王の政府と教会税「初穂料」の減免交渉に当たる。45歳のときにダブリンの聖パトリック大聖堂の主席牧師に就任する。52歳のとき、愛国的な小冊子「アイルランド全国民の国産品愛用を奨める提案」を発表する。56歳のとき4通の「ドレイピア書簡」(*Drapier Letters*) を匿名で発表してアイルランドの国民的英雄となった。58歳のとき『ガリヴァー旅行記』をロンドンで出版した。77歳1745年に死亡。遺体は聖パトリック大聖堂に埋葬される。以上がスウィフトの生涯を簡単に述べたものである。

つぎに『ガリヴァー旅行記』の第四編「フイヌム国渡来記」を中心にフイヌム (Houyhnm) とヤファー (Yahoo) の表すものをみてみよう。A. L.

モートンは『ガリヴァー旅行記』を理解するうえで荒廃したアイルランドで書いた事実の重要性を強調している。²⁰ 1720年に至るまでの6年間スウィフトはアイルランドにいた。そして彼は『ガリヴァー旅行記』の背景となったのは、2世紀に亘る戦火と失政の結果、荒廃の極にあったアイルランドであり、イギリス系の上層階級と土着の下層アイルランド農民とに国民は分裂していた。当時のアイルランドは民族意識をほとんど喪失したイギリスの一征服地となり果てていた。彼がブロブディンナブ国の豊かな農作を描くとき彼の胸中にあったのは餓死しつつあるアイルランド農民との対比であったとモートンは述べている。

スウィフトは前にもふれたが1720年以降アイルランドに関する小冊子を出し始めた。それらのなかでよく知られているのは「アイルランド全国民の国産品愛用を奨める提案」と「ドレイピア書簡」²¹である。このようなアイルランドの貧困と下層農民の救済を行うために彼は1729年に『一私案』のなかでつぎのように述べている。

だからほかの方策について何もわたしは言うまい。それは、わが国の不在地主にたいし一ポンドにつき五シリングを課税すること、われわれ自身耕作や生産に関係しないかぎり衣服も家具を使用できぬこと……われわれがラブランド人やトピナブーの住民たちとちがい、母国を愛する必要を教えること……片々たる小事で国家や良心を売ったりせぬよう戒心すること、小作人にたいし少しは地主も慈悲ぶかくなるようしつけること、など。つまり、誠実、勤勉、熟練の精神を商人どもにたたきこむことである。……²²

アイルランド国民の窮状を癒す可能性に全く絶望していたスウィフトはイギリスや不在地主の圧制によってアイルランド人がヤフーのような種族に代わるのではないかと恐れていた。さらにチャールズ・ファースは『ガリヴァー旅行記の政治的意義』において、貧民層から成り立つアイルランド人が、ヤ

フーと似通っていたこと、そして次第に没落して行くのを止めることができなければ、彼らは、すでにヤフーのような存在になりかねないことを述べている。これらをふまえながらも、モートンはヤフーとは人間を描いたものというよりは「スウィフトが胸底深く恐れていたものに対する警告」であることを指摘している。

こうしたアイルランドの貧困を憂いたスウィフトは、説教集『アイルランド窮状の諸原因』のなかでアイルランドの窮状を改革する提案をしている。それによれば下層階級の子供に英語の読み書きを教えるため、王国の各教区に学校を設立し、教師たちにしかるべき生活費を支給する程度のことは、立法府が十分に実行しうることである。これが実現すれば、アイルランド人がヨーロッパ中の人間に軽蔑される原因となっているその野蛮と無知も、やがては姿を消し、わが国民は理性の法則に従って思考し、また行動するようになるに違いない。勤勉、節約、正直の精神も彼らのあいだに導入されるであろうと述べ、アイルランドの窮状を救うために教育の導入を提案している。²³ スウィフトは目に映ったアイルランドの姿を詩の中でつぎのように表現した。

“Pursu’ d by base envenom’ d Pens,
 “Far to the Land of Slaves and Fens;
 “A servile Race in Folly nurs’ d,
 “Who truckle most, when treated worst.

下劣で辛辣なペンに追われ
 遙か奴隷と沼の地へきたる。
 愚かで従順な民族が、
 虐げられて服従する。

(395～398)

さてフィンムとヤフーは形の上では支配と隷属との関係にある。従って、ある意味では当時の英国とアイルランドの関係を表しているといえる。その

ような指摘は早くから行われ、ヤフーは野蛮で昔ながらのアイランド人を表すという指摘がC. H. ファースなどによって行われてきた。²⁴しかしながらガリヴァーが愛したフィヌムの国は理性の国であり、禁欲的な国である。この様な観点からすればイギリスすなわちフィヌムというの言いにくい面があろう。いうならばフィヌムとヤフーは人間の中にある相反する性質ともいうことができる。別の言い方をするとヤフーは人間の現実的なものをフィヌムは観念的なものを示しているとも考えられるだろう。

次にイーグルトンによるフィヌムとヤフーの解釈をみてゆく。スウィフトはアイランドを植民地とは見なしていなかった。プロテスタント・アセンダンシーの一人ウィリアム・モリヌー (William Molyneux) がそうであったように、彼はアイランドを主権のある王国として擁護しようとした。だが、事実は異なるということをスウィフトはもちろん承知していた。そして、これによって、現実的なものと観念的なもののあいだで、スウィフト特有の苦渋に満ちた弁証法が生じてくる。そこにあっては、観念的なものは、現実的なものによって仮借なく貶められることによって、現実的なものを諷刺するという役割を果たすのである。その点は、ヤフーとフィヌムの相互関係にも現れているとイーグルトンは指摘している。²⁵

要約すると、フィヌムとヤフーの関係は支配と隷属、イギリスとアイランド、さらには理性と本能、観念と現実という相対立するものを意味し、ガリヴァーはその対立を解消する役割を担っているといえる。この意味でガリヴァーはアセンダンシーの形象でありスウィフト、イエイツをも含むものとなる。このような系列に属するものとして、エッジワースの場合も考えることができる。

マライヤ・エッジワース (Maria Edgeworth 1767-1849) の『ラクレント城』 (*The Castle Rackrent*, 1800) はその副題にあるように「1782年以前のアイランド地主の流儀から」²⁶ となっているように、アイランド議会在立法府 (Act of Parliament) として地位を得る以前の地主階級的生活ぶりについて忠実な執事サディ・クァーク (Thady Quirk) によって語られ

る。ラクレント家はアングロ・アイリッシュではなく昔からのゲールの流れである。クァークは三代にわたって放縦な生活を送ってきたラクレント家について述べる。作者のエッジワースはオックスフォードシャーに生まれイギリスで教育を受けた後15歳のときロングフォードの父の領地があるエッジワースタウンに移り住む。以後独身のまま残りの人生をそこで過ごすことになった。1782年はアイルランドにとって記念すべき年でありアイルランド議会憲法が成立して独立を勝ち得た年であった。『ラクレント城』の前半部は飲酒が過ぎて死んだ気前のよいサー・パトリック、吝嗇家の Murtagh それにユダヤ人の妻を寝室に監禁しているサー・キット・ラクレントについて書かれている。第2部は教育のない気ままな政治家であるサー・コンディー・ラクレントについて書かれている。ここでの物語の核心は召使いサディのラクレント家に対する忠誠心が曖昧であり、表面的で両義的にとれる点であろう。それは結末においてサー・コンディーはサディの息子であるジェイソンによって破滅させられ財産を取られてしまう。

イーグルトンはサディ・クァークは忠義心の篤い下僕などではなく不満を抱く小作人階級の一類型をみている。1790年代は土地地主が小作人たちの反乱に悩まされた時代であった。サディはカトリック小作人階級の顔をもつと同時に土地地主階級の世界をも熟知する人間である。つまり支配階級と被支配階級の両方を行き来する人間である。その意味で立場こそ異なるがガリヴァーとサディは同じ形象に属しているといえる。

以上のようにイエイツがスウィフトにみたのは、アセンダンシーの表象としての姿であった。次に時代認識という観点から二人をみてみよう。イエイツによれば、15から17世紀までのアイルランドは混乱と暗黒の時代であったが、18世紀になってようやくスウィフトによって国家というものを意識したという。アイルランド議会が立法府として地位を得る頃を頂点として、その後のアイルランドは「併合法」とともにイギリス化の道を歩んで行く。土地所有の形態にもそれははっきりと現れて不在地主化 (absenteeism) が進行し、さらには地主階級の没落に繋がって行く。二人に共通するのは、次に混

乱する時代が到来するという認識であった。

イエイツがもっとも心惹かれたものに、セント・パトリック教会の内壁にラテン語でスウィフト自身によって書かれた墓碑銘がある。スウィフトの墓碑銘は彼が冷やかにも生をそれ自体永遠の目的として見なさなかったことを示している。そのことは彼がスウィフトのことを「生の価値を否定した最初の偉大な近代人（精神）」と呼んだことと関連している。²⁷

Here is laid the body of Jonathan Swift,
S. T. D. [Doctor of Sacred Theology],
Dean of this Cathedral, where savage
indignation can no longer lacerate his
heart. Go, traveler, and imitate if
you can this vigorous defender of human
liberty. He died on the 19th day of
the month of October, in the year of
our Lord 1745 and the 78th year of his
own life.

ここに眠るはジョナサン・スウィフト
セント・パトリック教会のディーーン。
激しき怒りもいまや
その心を引き裂きえぬところへさりぬ
行け、旅人よ。あとうならば模倣せよ
人間の自由を限りなく守ったこの男を

これはローマの詩人ユウェナーリス (Juvenalis) の「力出しきれぬとき、怒り詩となって顕れん」の影響を受けたものといわれるが、イエイツはこれをつぎのような詩の形式にして英訳を行っている。

Swift has sailed into his rest;
Savage indignation there
Cannot lacerate his breast.
Imitate him if you dare,
World-besotted traveller, he
Served human liberty.

スウィフトはついに憩いについた
激烈な憤怒も いまや そこでは
その心を引き裂きえぬところへさりぬ
世俗にとりつかれた旅人よ
能うならば模倣せよ 人間の
自由のもとに仕えたこの男を

「人間の自由を限りなく守ったこの男」という自負はスウィフトの他の詩に
おいても見受けられる。

“Fair LIBERTY was all his Cry;
“For her he stood prepar’ d to die;
“For her he boldly stood alone;
“For her he oft expos’ d his own.

すばらしき自由こそが彼の叫びであり、
そのために死ぬことも厭わなかった。
そのために独り敢然として立ち、
そのために己をさらすこともたびたびだった。

イエイツは『窓ガラスに刻まれた言葉』 (“Words upon the Windowpane”,

1934) の序文で述べた自分の見解を、この劇中の人物でケンブリッジの学生ジョン・コーベットを通じて表現している。スウィフトの時代は知性のある人間が最高の権力を獲得した時代であった。「アイルランドと私たちの気質のなかの偉大なもの、現在つたわる建築の偉大なものはすべてその時代に由来する。私たちは英国よりもずっと長くこの時代の刻印を保存している。」さらに序文のなかで、「ボイン河の戦いは宗教と神話に満ちた文明を覆し、大きな黒板の上で立案された知的法則がそれにとって代わった。……それは（ボイン河の戦い）プロテスタント貴族社会を生み出した。だがそのなかには自らを英国人と呼ぶこともなければ、征服されたアイルランドを蔑まず、恐れも抱かない者もいた。アイルランドの諸侯、民のみがわれわれの法律をつくる資格を有した。私たちの議会は英国議会と同じほど歴史がある。スウィフトは『ドレイピア書簡』を通して彼の民族意識を見出したのだった。彼の信念は行動と情熱から生まれた」と述べている。さらに、コーベットはスウィフトの悲劇を説明するものとして「きたるべき破壊をスウィフトが予見した」ことを指摘している。彼が理想とする秩序はローマの上院、理想の人物はブルトゥスとカトーであった。このような秩序と人物がふたたび現実となるかに見えた。しかしその気運は去り、民主主義、ルソー、フランス革命などによって「普通の人間」が権力をもつ時代の到来を彼は予感した。

‘He foresaw the ruin to come, Democracy, Rousseau, the French Revolution; that is why he hated the common run of men, …… that is why he wrote *Gulliver*, that is why he wore out his brain, that is why he felt *saeva indignatio*, that is why he sleeps under the greatest epitaph in history.’²⁸

スウィフトは少数者の知性が多人数の蒙昧に侵されてはならないと考えデモクラシーを嫌った。それと同じことを彼はフランス革命や今後の社会に予感していた。イエイツはローマやギリシャが多数者による少数者への戦い

によって破滅したことをスウィフトの文から引用している。²⁹ それが彼に『ガリヴァー旅行記』を書かせ正気を失っていった所以であること、また激しき怒りを感じた所以であり、また「彼は激しき怒りももはやその心を引き裂きえぬところへさりぬ」という歴史上もっとも偉大なあの墓碑銘のもとに眠っている所以であると述べている。³⁰

イエイツは自らの時代に終末意識をもっていた。それは彼の歴史認識のなせるわざであった。彼は自らを歴史の転換期にいと考へ、18世紀のアセンダンシー、なかでもスウィフトと自らを重ねるとき、スウィフトが予見した「きたるべき破壊」と自らの終末意識との類似を意識していた。最後にイエイツの墓碑銘からこの問題を考察して行きたい。それはつぎのような四行詩である。

Draw rein; draw breath.
 Cast a cold eye
 On life, on death.
 Horseman pass by.

一行目の“Draw rein, draw breath”は18世紀的なコンヴェンションである“Pause, traveller”の修辭的な言い換えといえる。「冷たい眼を向けよ/生に 死に」というフレーズにはスウィフトの今や静まり返った「激烈な憤怒」のエコーが感じられる。さて最終行の「騎馬の者」(horseman)の解釈がこの墓碑銘の鍵となる。「騎馬の者」は大きく分けるとつぎの三つの解釈に分類される。第一は、horsemanとはノケナリア周辺に住む妖精(Sidhe)や神話上の神々を示すとする説、第二は馬と戦士クフーリンとの関連を述べる説、そして第三に終末論的世界観と馬とを関連づける説などがある。³¹ここでは第三の説に従って解釈してゆきたい。³²

アンテレッカーはこの墓碑銘やいくつかの詩に、「切迫した反転する世界像というイエイツの黙示録的なビジョン」を読みとっている。たとえば、

「一つの折り返し句で三つのうた」(“Three Songs to the One Burden”)では「各世代がめぐりくるたびごとに/アイルランドの血は流されるんだと/山カラ山ヘト馬上ノ男 荒々シク駆ケル」とうたっている。(p.205)つまり、騎手が山頂から下り現在の混沌を消滅させ新たな正反対の秩序をもたらす時を示している。イエイツは終末論的な世界と馬とを結びつけて考えている。³³ その世界は破壊され周期的に循環する世界である。民族間、国家間、階級間の冷酷な戦争という出来事が続く歴史にあって終末論的世界観のもつ意義を、ベルジャーエフは『始源と終末』のなかで次のように説明している。彼は「世界調和という理想像は精神によって捉えることのできる世界像であって、この世界像は世界の変容を予期しているのである。この世界の美、人間の美、自然の美、芸術作品の美、これらはすべて世界の部分的な変容のしるしである。それは別の世界へと向かう創造的な突破口である。世界調和や世界秩序を考える唯一可能な方法は、これを終末論の一部とすること」³⁴であると述べている。このような終末意識は『再臨』や『瑠璃』(“Lapis Lazuli”)で明確に現れている。ブレイクが『精神の旅人』でおこなった如く、イエイツは『ヴィジョン』のなかで、歴史の寓意をガイアー(環)によって表現しようとしたが、「騎馬の者」もその延長線上にあるものといえる。つまりそれは混沌とした世界に新たな秩序をもたらすメシア的存在を象徴しているといえる。

イエイツは過渡期に生きていることを意識し終末感を感じたとき、「来たるべき破壊」を予見したスウィフトのなかに彼と類似したものをみてとることで、彼はアセンダンシーとの同一性を認識したのだった。そしてその結果として、彼の文学はモダニズムの一つの特徴たる終末感覚を帯びることになったといえる。

おわりに

イエイツの詩・劇そしてエッセイを通して、世紀末アイルランドの地主階級の没落という社会変化を彼がどのようにを受けとめてきたかを検討してき

た。きわめて現実的で地域特有の社会現象であっても、それが文学に扱われると原型的かつ普遍的な出来事となって作品に内在化することがよくある。イエイツの場合においてもアセンダンシーの崩壊という社会変化は概念化し抽象的な終末意識と結びつくものとなった。さらに、これを検討するに当たって、アセンダンシーの形象となるガリヴァーを軸にしてイエイツにとってスウィフトのもつ意味を考察してきた。イエイツは過渡期に生きていることを意識し終末感を感じたとき、「来たるべき破壊」を予見したスウィフトのなかに彼自身と同質ものをみてとった。そうすることで、彼はアセンダンシーとの同一性を確認したのだった。そしてそれが概念化され結果として、彼の文学にモダニズムの一つの特徴たる終末意識を作り上げることになったといえよう。

注

1. R. F. Foster, *W. B. Yeats : A Life I: The Apprentice Mage 1865-1914*, (Oxford U. P., 1997), pp.162-163.
2. フランク・カーモード, 岡本靖正訳, 『終りの意識：虚構理論の研究』, (国文社, 1991), p.18.
3. ノーマン・コーン, 江河徹訳, 『千年王国の追求』, (紀伊国屋書店, 1978)。
4. 『終りの意識』, p.119.
5. W.B.Yeats, *Autobiographies*, (Macmillan,1955), p.304.
6. 島津彬郎訳『幻想録』, (プレジデント社, 1978), pp.232-4.
7. 『終りの意識』, p.116.
8. W. B. Yeats, *The Letters of W. B. Yeats*, edited by Allan Wade, (Octagon Books, 1980), p.851.
9. *Nationalism, Colonialism, and Literature*, (University of Minnesota Press, 1990), pp.12-3.
10. Terry Eagleton, *Heathcliff and The Great Hunger : Studies in Irish Culture*, (Verso, London, 1995), 鈴木聡訳『表象のアイランド』, (紀伊国屋書店, 1997), p.522.
11. 拙論参照。「W. B. Yeats とナショナリズム」, 『桃山学院大学人文科学研究』

第20巻第3号, 1985年。

12. Joseph Hone, *W.B. Yeats*, (Macmillan, 1943), p.31.
13. R. F. Foster, *W. B. Yeats : A Life I: The Apprentice Mage 1865-1914*, *op. cit.*, pp.28-29.
14. “Upon a House shaken by the Land Agitation”, Peter Alit and Russell K. Alspach, *The Variorum Edition of The Poems of W. B. Yeats*, (Macmillan, 1940), p.264.
15. 『イエイツ・エリオット・オーデン』筑摩世界文学大系71, (筑摩書房, 1975), p.139.
16. *Ibid.*, p.139.
17. 『表象のアイランド』, pp.269-81.
18. W. B. Yeats, *Explorations*, (Macmillan, 1962), p.345.
19. W. B. Yeats, *The Letters of W. B. Yeats*, edited by Allan Wade, (Octagon Books, 1980), p.776.
20. A. L. モートン, 『イギリス・ユートピア思想』, (未来社, 1967), p.133.
21. 当時ウィリアム・ウッドなる男が国王の愛人を通じて品質不良の半ペニー銅貨をアイランドに供給する特権を得たのに対してダブリンの一呉服商ドレイピアの仮名のもとにスウィフトはその非を警告したもの。
22. 『イギリス・ユートピア思想』, p.134.
23. ジョナサン・スウィフト, 『スウィフト政治・宗教論集』, 中野好之・海保真夫訳, (法政大学出版局, 1989), p.326.
24. 和田敏英, 『ガリヴァー旅行記論争』, (開文者, 1983), pp.196-204.
25. 『表象のアイランド』, p.275.
26. Maria Edgeworth, *Castle Rackrent*, edited with an introduction by George Watson, (Oxford U. P., 1969).
27. イエイツの最後一年間に書かれた詩と墓碑銘の関連についてはつぎの論文で述べた。「イエイツの『最後の詩集』」『桃山学院大学人文科学研究』 第23巻第2号, 1987年。
28. *The Variorum Edition of the Plays of W.B. Yeats*, pp.960-961.
29. *Ibid.*, p.961. スウィフトの考えは「アテネとローマにおける貴族・平民間の不和抗争およびそれがこれら両国に及ぼした影響について」に詳しい。『スウィフト政治・宗教論集』。
30. *Ibid.* p.961.

31. イエイツの騎馬の者と終末論的世界観との関連について。(Allen p.81)

アト・ド・フリースは *Dictionary of Symbols and Imagery* のなかで、Horseman とは再臨のときキリストが乗る馬・メシアの馬として黙示録に用いられている。また、「七十人訳ギリシア語聖書」(Septuagint) には「深みに立つ山々」(“mountains standing in the depth”) と記されている。その背後には「赤馬、栗毛の馬、白馬がいた」とし、山と馬を関連づけている。その後、イエイツの Horseman にも言及し、「未来の騎手は世界の果てにある山からやってくるだろう。」としてメシア的性格を指摘している。

32. James Lovic Allen, *Yeats's Epitaph*, (Washington, 1982) を参照。

33. アイルランドの古代神 Manannan (one of Sidhe) と馬との関連について：John Unterecker は Ethel Mannin に宛てた手紙の一部分と “He bids his beloved be at Peace” (「彼、恋人に心やすらかにせよと言う」)、“Three Songs to the One Burden” とイエイツの 墓碑銘などを関連づけている。マナナンは馬、死、そしてアイルランド神話の異界と特別な関連があるが、そのことはこの場合の Horseman のイメージに大きな意味をもつ。イエイツ自身の注はそれを裏付けている。(馬の姿をしたプーカ Pucas は死者の国を支配するマナナンの馬と関連がある。詩の「陰なす馬」は、フォモーレ (古代アイルランドにいた種族。馬の姿をした妖精プーカだと考えられていた。西から来たトゥアーザ・デ・ダナーン族と戦い、破れて放逐された。)

34. ベルジャーエフ、『始源と終末—終末論的形而上学の試み』,(行路社, 1985), p.226。

W.B. Yeats and the Anglo-Irish Ascendancy

Ryuhei Kusaka

The purpose of this paper is to investigate how social changes in the later nineteenth century had a great impact on Yeats, through his literary works. Yeats was brought up in the *ancien régime*: Victorian, Protestant, Ascendancy Ireland. The Ascendancy, here, represented the dominant Irish Protestant class. Some of them were Anglo-Irish absentee landlords of the ruling class. Yeats's family, which had a farm in Kildare, belonged to the Ascendancy, too. His youth spanned the period that inaugurated the decline of this Irish Ascendancy, as the outbreak of the Land War then shows.

This paper is made up of three sections: In the first, Yeats's sensitivity to the times, such as the sense of an ending, is illuminated in such poems as "The Second Coming". In the second section, I make it clear that the apocalyptic vision which can be seen in the poem is derived from the decline of the Anglo-Irish Ascendancy. In the last section, the process in which Yeats came to identify himself with Jonathan Swift is dealt with. Swift's Gulliver, who was isolated between Yahoo and Houyhnhnm, represents a symbolic figure for the "Ascendancy which was both colonized and colonialist", to use Eagleton's words. Yeats regarded him as an example of the Anglo-Irish Ascendancy and followed him.